

現代日本の映像メディア・コンテンツの動向 ～メディア・ワークショップ「じゅりすと」の視点から～

吉 田 和比古

0. はじめに～「亀は意外と速く泳ぐ」～

かつてラスコーやアルタミラの洞窟に動物の壁画を描いたのはるか大昔の人たちは、そこにじっと動かない「静止画像」を描いたのではないという考えには賛成である。そもそも真っ暗な洞窟に描かれた動物の絵は、何らかの照明を用いなければ見えるはずがない。そこで、松明をかかげてそれらの画を眺めるとしよう。当然ながら松明の明りは、光源として揺らめくと、それに伴い洞窟の凹凸のある岩肌というキャンバスに描かれた狩猟の対象となる動物たちもかすかに揺らめいたはずである。おそらく動くはずのない画が、あたかも魂を吹き込まれたかのように（animation）、生き生きとうごめくことに人々は、驚きと畏敬の念と、そして画像に刺激されて頭の中でさまざまな「物語（過去の記憶や未来の予測）」を想像することにひそかな喜びを感じたであろうと、私はいつも考えている。

現代の日本の子供たちは、生れ落ちてから、動く絵がすでに生育環境の中に存在していることをなんら不思議に思わないだろう。その動く絵は、テレビやパソコンのモニターあるいはケータイの小さな画面の中で、現実の中で確認できる人や物の動きと同じ速度で動いているという意味で第2の現実を作り出し、動く映像と動く現実世界の二重構造の中で成長していく。1950年生まれの筆者にとっては、最初から動く絵は日常生活の中に存在しなかった。それは映画館という非日常的な暗闇の空間の中でこそ存在していた。日常世界の中では「紙芝居」という動かない絵の世界と接しな

がら、その絵を脳の中のイメージで動かしていた。そしてテレビの登場である。ようやく動く絵は自らの日常生活の一部になりかけてきた。日々の生活の中で動く絵を手にした人々は、もはやお金を払ってまで映画館という名の「光と影の祝祭的空間」に詣（もう）でようとしなくなった。

かつて、テレビが登場するまで、子供たちの「動かない絵を動かしてみたい」という願望をかりうじて満たしていたのは、「ぱらぱらマンガ」である。「ぱらぱらマンガ」は、かつて子どもの頃学校の授業中に、子どもの手にはいささか厚手の教科書のページの隅を使って描かれた。たとえそれが稚拙な絵であったとしても何枚かの画をぱらぱらとめくった瞬間、人間の視覚認識の残像効果などという科学的知識がない状態で、ほんの少し、1秒以下の時間、その画が動いたかのように感じたとき、かすかな喜びとほんの少しの満足感を感じた記憶を持ち続けている人も多いはずである。それは遙か太古の人々の経験をも我々の内部に呼び覚ましてくれる身体行為である。そして、1895年に人間は、フランスのリュミエール兄弟により動く画すなわち「映画」を手にする事となる。

2006年に公開された日本映画『亀は意外と速く泳ぐ』では、冒頭のタイトルクレジットの画面で、いわゆる「ぱらぱらマンガ」が登場する^(注1)映画監督は、テレビの情報エンターテインメント番組の構成作家・三木聡である^(注2)。この冒頭が意味するところは深い。それは、これから、一秒間に24コマの静止画像の連続した動く絵を見せますよと言う映画作家の開始宣言のようでもあり、動かない絵を動かすようにいろいろと工夫してきた過去の幾多の映像こだわり人間たちへのオマージュ（賛歌）のようでもある。それと同時に、われわれ観客に対して、冒頭に述べた幼い頃の記憶を呼び覚ますのに十分な、そしてこれから始まる「動く絵の物語」への期待に、あたかも児童文学の一ページを開く時のようなわくわくする感覚を刺激してくれる。映画の冒頭タイトルクレジットのこのぱらぱらマンガは、日常から映画という非日常へと軽やかにすべりこむための媒体すなわちメディアとして、実に巧妙な仕掛けにもなっている。ついでに言うならば、

2006年に公開された本広克行監督の「UDON」では、主人公が子ども時代に教科書の端に描いたばらばらマンガが、物語のもうひとつの伏線を形成しており、それがやがて映画の中でSFXを駆使した「CAPTAIN UDON」という「劇中劇」を形成しているのが興味深い^(註3)。

以下では、2006年度第1および第2セメスターの「法政演習（メディア・リテラシー）」で1年間かけて実施した演習の内容に沿った形で論考を進めていくことにする。本来、『法政理論』は、法学部の学生が毎年入学時に納入する賛助金を主たる予算として運営されており、当然ながら、発表される論文なども可能な限り学生の学習に何らかの形で寄与できる内容であることが望ましいのではないかと考えている。その意味では、『法政理論』の紙上で発表される論文や研究ノートは、高度に専門的できわめてアカデミックであるがゆえに、学生にほとんど読まれないという事態は、できれば回避したい。そこで今回筆者は、昨年の「法政演習（メディア・リテラシー論ⅠおよびⅡ）」で扱ったテーマを、再度紙上を借りて広く紹介することにした。この演習は、実定法を機軸とする法学部の中心的な演習から見れば、まさに周辺的であるが、今では消滅してしまった法政コミュニケーション学科がユニークな学科として全国的に知られていた時代、もう少し中心部に位置していた。ともあれ、昼夜を問わず熱心に法律の勉強にいそしむ現在の法学部の学生に対して、リーガル・マインドとは少し違った物の見方を提供することができれば、そしてほんの少し、メディア・マインドを身に付けてもらえれば、演習としての存在意義は維持されるものとひそかに自負している。昨年の演習のテーマは、1期は(1)「現代の映像媒体の原点としての絵巻物と日本のアニメーション」に焦点をあてて、その独特の表現形式を理解すること。(2)「映画と演劇」の表現の差異性の発見と、両者の言語表現の質的差異の発見。(3)映画とその原作としてのマンガの関連研究である。1年間でやり遂げるにはかなり大きい主題であるが、テーマ自体はゼミの学生が自発的に提起したものであることを明記しておきたい。

以下では一年間の活動の中間報告という形で、やや羅列的な記述になるが、現代の様々なメディア（媒体）を横断する「物語」について、学生との討論の成果なども随所に取り入れながら考察を進めていきたい。

（注1）このタイトルの原画は、漫画家小田扉の作品である。小田の代表的作品には『団地ともお』がある。

（注2）三木聡の初監督作品は「イン・ザ・プール」で、「亀は意外と早く泳ぐ」は2作目にあたる。

（注3）2006年に公開された「UDON」は2006年に公開されたが、本広監督は、それに先立つ作品「サマータイムマシン・ブルース」の中で、数多くの伏線をつくっていたということが、[UDON]を見ることによって分かる。

1. アニメの原点としての『絵巻物』は再発見される

現代の芸術家が、日本の伝統的な美術の一つである「絵巻」に注目している事にはいろいろな理由が考えられる。その代表的な理由として高幡勲の「絵巻はアニメのルーツ」であるという考えに注目したい^(註4)。とはいえ、日常的に絵巻物に接するという機会が少ないだけに、絵巻物というメディアの特質について我々はあまり多くの知識を持ち合わせていない。本論を執筆するきっかけの一つは、2006年春、新潟で開催された「復元された源氏物語展」である。ゼミ生と課外研修の一環として鑑賞し、この時初めて絵巻物に具体的に触れることができた。話が少しそれるが、近年になり映像芸術が、一つの美術展を形成するという事例が目立つようになり、特定の漫画家やアニメ作家に関わる美術館も各地に作られるようになってきた。美術展と言うと世界的に有名な画家の作品の展示という、いささか芸術のレベルの高さを連想させるが、映画というきわめて大衆文化に密着したメディアを展示のコンセプトにするというのは、数十年前では考えられなかった事であり、これはまた映画という、ともすればサブカルチャー的なメディアが、時代の空気と密接に連動したアートを形成しうることへ

の再評価の結果でもある^(注5)。

(注4) 高幡勲「十二世紀のアニメーション～国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なもの」

(注5) 「スターウォーズ展」。この美術展のキャッチコピーは「スターウォーズは、とんでもなく芸術である」(2003年・名古屋、2004年・福島市および会津市。2005年・東京「エピソード3展」)「ディズニー・アート展」2006年1月23日～2007年1月14日、新潟県立近代美術館(長岡市)。

さて、実際に絵巻物を目にすると、そこには現代の映像メディアにも直結するようなさまざまな発見がある。以下では、その絵巻物について扱った3つのテレビ番組について簡単に概説してみたい。

(1) 「絵巻・視覚の迷宮」<『新日曜美術館』2006年・教育テレビ>

全長25mほどの巻物に文字と絵画によって物語を表した絵巻は、世界でも類をみない、日本独自の芸術であった。平安時代半ばに誕生したと考えられる絵巻は12世紀には絵画表現としての頂点を迎え、その影響は現代の芸術やエンターテインメントの作品にいたるまで脈々とつづいてきている。この番組では、絵巻表現の可能性の全てが含まれているといわれる傑作「源氏物語絵巻」、「信貴山縁起絵巻」、「鳥獣人物戯画」などを主にとりあげ、そこに凝縮された絵画技法をさまざまな映像で検証することにより、絵巻物の絵画作品としての奥行きを伝えている。また現代のクリエイターや研究者にインタビューし、絵巻物という表現形態の独自性を浮き彫りにすることで、その表現の後の世代への影響のありようも考察されている。番組にもとづくと、絵巻物の視覚表現を3つの視点から分析が可能とされる。第1点は「空間表現」であり、これは映像のカメラアングルの設定に対応している。「源氏物語絵巻」の建物の屋根や壁を描かない「吹抜屋台」といわれる俯瞰構図や「信貴山縁起絵巻」の独自の遠近表現が丁寧に分析されている。ここで注目したいのは、それらの技法がすでに映像のカメラアングルの文法<クローズアップ/パン：カメラの水平移動

／フォーカシング(焦点設定)＞などを先取りしているということである。2点目は「時間表現」で、これは映像のカット編集（編集）と密接に対応しているといつてよい。例えば、「華嚴宗祖師絵伝」などでは、限られた空間の中で時間経過を表すため同じ場面や人物が同一の画面に何度も描かれる反復描写や異時同図（これは映像の画面を二つに分割して、別の時間のできごとを同時に表現する技法と同じである。なお、この技法は映画「サマータイムマシン・ブルース」（2005）で時間移動の際に多用されている）。3点目は「人物表現」。「源氏物語絵巻」の人物を人形のように描く「引目鉤鼻（ひきめかぎはな）」から「鳥獣人物戯画」の自由闊達な描線が分析される。この人物の顔については、俯瞰のアングルと実際に人物の顔が良く見えるための水平のアングルが同時に実現していることには驚かされる。以上概観してきた様々な描写技法の工夫によって発展した絵巻物の絵画表現としての豊かさは、現代日本のマンガ文化ひいては、ジャパニメーションともいわれる日本独自のアニメーション文化に連なっていることを予測させるのに十分な内容となっている。

(2) 「科学の目が見た国宝“伴大納言絵巻”」＜『新日曜美術館』2006年・教育テレビ＞

平安時代後期、後白河法皇のもとで制作された数々の物語絵巻の中でも、「源氏物語絵巻」と並び称せられる名作のひとつに国宝「伴大納言絵巻」がある。前者は例えれば「ラブストーリー」の原点とも言えるのに対し、後者は、いわば「ドキュメンタリー」である。「伴大納言絵巻」は、平安時代に大内裏の応天門が炎上するという実際に起きた放火事件をもとに描かれており、上中下巻合わせて27メートルにもなる大作。話は、当時の政界トップの実力者たちが絡んだスキャンダルへと発展し、複雑な政治権力の確執が浮き彫りにされる。ここで描かれる内容は、いわば冤罪事件を扱った「ドキュメンタリー」にも匹敵すると言っても過言ではないし、伴大納言の野望と挫折は、権力を操った後白河法皇の時代のスリルに富んだ物語となっている。絵巻の筆者は、12世紀を代表する宮廷絵師・常磐光

長。番組では、科学調査によって見えてきた常磐光長の卓越した構成員、そして宮廷内部に出入りした者でなければ知り得ない正確さで描き出された当時の人々の姿を紹介し、あたかも映画を楽しむように展開する絵巻の醍醐味を味わえる構成になっている。

(3) 「奇跡のエンターテインメント：国宝“信貴山縁起絵巻”の大宇宙」
＜2007年1月2日・NHK＞

国宝「信貴山縁起絵巻」は日本三大絵巻のひとつで、その魅力は、平安時代末期の制作とはとても思えないような、エンターテインメント精神にあふれた絵画表現と物語性にある。托鉢に使うための「黄金の鉢」がSF映画さながらに米蔵を持ち上げ、空を縦横無尽に飛び回り、けちな長者を懲らしめる。重い病に臥せる天皇を、空の彼方からやってきた謎の少年「剣の護法」が魔法の力で癒す。なぜ800年以上も前にこのような壮大なファンタジーが作られたのか？その謎を解くために気鋭の表現者3人が探求する。マンガコラムニスト・夏目房之介さんは、巨大絵巻を転がしながら表現を分析。さらに、不思議な「飛鉢伝説」の謎を追って近畿一円を取材する。美術家・森村泰昌さんは、絶大な人気を誇るヒーロー「剣の護法」と向き合い、装束や小道具を精密に再現。自ら主人公に変身し、絵巻を映像作品に仕上げるまでの3か月をドキュメントする。女優・白石加代子さんはある夜、静まり返った東大寺大仏殿の中で、絵巻の詞書を朗読。絵巻のラストシーンを「声」で現代に蘇らせる。（以上の記述に当たっては、番組ホームページを参考にした）

以上紹介してきた絵巻物の世界では、動かない絵を見る側のイメージ操作で動くものとして認識されてきたが、その技法は、現代のマンガにも十分通じると言えるし、そのマンガが、絵を動かす技術を手にした現代人により、いつでも動かしようということは、じつは、映画やテレビドラマの原作として、マンガが非常に大きなウエイトを占めている事情と大きな関係があると筆者は考える。事実、上掲の絵巻に関する番組においては、しばしば絵巻の画像をアニメのように動かして見せるという場面が登場する

が、それは番組の作り手と視聴者が密かに共有している願望の実現とも言えよう。静止画のマンガを動かすための仕掛けとして、アニメーションの技法に至る歴史的過程は省くが、次節では、アニメーション（以下アニメと略記する）の一例として、現在教育テレビで放映中の人気アニメ「おでんくん」を中心にアニメ・メディアの表現の可能性、換言すればメッセージの可能性について考察する。

2. アニメーションで哲学を物語る事は可能か

アニメーションも『物語』のひとつの表現形態である。そして、「おでんくん」の特徴は現代の「寓話」とも言える点にある。寓話はかつて哲学が語られる言説の一形式であった。その意味でアニメーションは哲学を語りうる可能性を持つ。かつてドイツの哲学者カントが何ページも費やしたような哲学的事象が、言語テキストで多くの人々に読み解かれる時代状況は残念ながら遠のいた。現代人は、活字（プリント・メディア）という名の言語メディアから確実に離れつつある。放送と通信が融合する時代の即時的な映像情報は、受け手の五感の全てを駆使して短時間で了解される。一方短編アニメ「おでんくん」の中で紡がれる物語の中には、十分に哲学的トピックスになりうる事例がいくつか発見されうる。一例をあげると「ニセおでんくんの巻」である。主人公おでんくんの目の前に「ニセおでんくん」が現れる。おでんくんは、自分ときわめてよく似ている相手に「君はニセおでんくんだね」と言うと、相手は「違うよ、ほくは本物のニセおでんくんだよ」と答える。見ている側としては、これは絶対に子供向けの言説<ディスクール>ではない事に気が付き、より注意して画面を見てみると、「ニセおでんくん」が象徴する人間の性格の一部、すなわち社会的な約束や常識を、少し懐疑的に構えて見ようとするスタンスの取り方が、自分たちにも内在している事に気づかされて、つい感情移入してしまい、主人公のおでんくんと一緒に「自分とは何者だろう」というほんの少しの哲

学的疑問に浸ることになる。ついでに言うならば、日本のアニメの多くの作品「機動戦士ガンダム・シリーズ」「攻殻機動隊・シリーズ」「新世紀エヴァンゲリオン・シリーズ」などは、単なるSFあるいは近未来を舞台とする物語が展開されるのみならず、そこには現代世界の価値観を反映した形で、専門家の言説のように声高ではないにせよ、平和論・生命論・環境論などが語られていることに注目すべきである。

いずれにしても、かつて言語メディア(とりわけプリント・メディアとしての書物)が果たした役割のかなりの部分を、映像メディアが果たしつつあるという現状をいったん承認するとして、それでは言語について学ぶことが無意味になるのか。ここでは「無意味とは何か」という哲学的問いは発しないで、むしろ映像メディアが支配的に見えるからこそ言語の復権が緊急の課題となるというように視点を変更する必要がある。なぜならば、映像メディアは、視聴覚的な感覚をはたらかせた結果、自分の外の世界を無批判に受容してしまうという危険性を内在しているからである。つまり、言語メディアの反復受容性は重視しておかなければならない。映像メディアをとおして視聴覚的に取り入れられた情報は、受け手が主体的に自らの言語で再構成するという作業過程を通過しないと、我々は押し寄せる情報の洪水に溺れ、情報の奴隷になってしまうだろう。重要なのは、映像情報をもう一度「言語化する」という事である。言い換えると、自らが見た映像について自らの言葉で語るという事である。そしてこの段階で、映像を読み解く文法、あるいは映像の文法を知識として習得する学習過程を仕掛ける必要がでてくるといえる。つまりここではアニメという一種のパラ言語(映像+言語)を画像認識だけでなく、いかに言語的に理解するかの訓練が絶えず実践されていなければならない。その訓練の仕方としては、わずか7分から8分の番組のストーリーを書いてみるというのでもいい作業である。訓練の素材としては、映画感想文のレベルから、マスコミで扱われる映画批評にいたるまで多岐に広がる。文学を読んだ感想文から映画を見た感想文—これは作業的にはパラレルである。両者の差異は、情報

媒体が「言語メディア」であるか「映像メディア（言語+映像+音）」であるかの違いである。実は、文学について語るための言語すなわちパラ言語の習得が、国語教育の一部であるように、後者も国語教育の一部とならうことは説得力がある。すなわち「映像メディアリテラシー教育」は、絶えず『言語メディアリテラシー教育』という本来の教育にとって不可欠の補完的領域を形成していることを認識すべきである。

繰り返しになるが、「おでんくん／無意味って何ですかの巻」について、タイトルそのものがもはや子ども向けではないということを指摘した。「意味」という言葉の抽象概念にさらに「無」という否定概念がつく言葉を子どもが理解するはずもないからである。番組では「物語」の展開の過程において、見事に「無意味」という言葉の持つ意味を直感的に把握させるような仕掛けになっている。ここで原作者リリー・フランキーは、文学ではなしえない、メッセージの発信と受信を完結させるしかけとして、アニメーションを効果的に用いているといえよう。ここでは、彼のベストセラー小説『東京タワー、オカンとボクと、時々、オトン』と『おでんくん』における、男の子とその母親の絆という共通モチーフが意味することについて、ここでは深くは触れないが、いずれにしても、彼の姿勢は、日本語になりきれない独特の翻訳文体を呪文のように用いて、高邁で難解な言説をふりまこうとする哲学者よりも、視聴者に確実に自らのメッセージを伝えようとする文学者の企みと良心に満ちているといえよう。いずれにしても、アニメ「おでんくん」は世代を超えて享受しうるエンターテインメントとしても、大変いい味を出している。マンガという媒体の持つ『物語』—それは、まだ動きを持たない静止画の連鎖である。マンガが動き出すとき、それはアニメとなる。洞窟壁画から絵巻物、そしてマンガからアニメへ、表現手段を進化させつつ、人間の動く画像への原初的な願望は、途切れることなく続いている。

3. マンガは、映像のための「絵コンテ」である

最近、日本映画が元気であるというときにその対象となる作品においては、映画独自の脚本でつくられたものは少なく、他のメディア・ジャンルに大きく依存している傾向については、否定的な声が多い。だが、映画の歴史を見ると、多くの名作は、文学を源泉としてそれが映画用に脚本化されたものである。そうした流れについての確にまとめている点で次の論述は興味深い。

「角川映画がヒット作を連発していた頃、『読んでから見るか、見てから読むか』というコピーが流行し、出版界と映画世界とは切っても切り離せぬ、良きライバル関係にあった。その後も時代を彩るベストセラーや話題作などは、その都度映画化されてきたが、必ずしもヒットに結びつくとは限らず、文学と映画との親密さは薄らぎつつあるように感じられた。ところが、ここ数年再び小説を映画化する動きが活発となり、過去3年の年度別製作本数38本、50本、62本と年々増え続け、しかもそれはポピュラーな小説にとどまることなく、例えば大きな賞に輝いた句の作家の受賞作から、それ以前の作品に遡ったりもしている。過去の作品であれば既に文庫化されているものも多く、値段的にも重量的にも手軽であるため、発行部数にも反映されやすく、映画化のニュースを早い段階で打ち出すことで、公開までの準備期間中の売り上げ部数の伸びが、そのまま映画の宣伝になる。それはオリジナルの脚本をゼロから作り上げる労力やリスクを背負うよりも、パッケージ化しやすい小説やマンガを出発点にする方が無難であるという、映画業界の安全思考にも通じているようにも思う。」^(注6)

(注6) 服部香穂里「キネマ旬報」2006年 No1470 (11月上旬号) p.47

物語を語る映画が、その原作を文学に依存するという傾向は、もう一つの流れとシンクロナイズしている。それはマンガからの映画化の流れである。このことは映像作家に靈感を吹き込む物語がマンガの中に多く存在し

ていることを示唆している。1970年代後半からのマンガの実写映画は、作品自体の話題性から生まれた作品と、アイドルを売り出すための作品になっていくが、90年代はアイドルが激減することにより、マンガ原作の実写映画も方向性が変わってくる。90年代の傾向として特徴的なのは、テレビドラマが積極的にマンガに原作を求めだした点にある。マンガ人口が高年齢にシフトしていくにつれ「サラリーマン・マンガ」も多くの支持を集めた。しかし、21世紀に入り、映像配信メディアの多様化によって、テレビドラマが以前ほどには視聴率を取れなくなり、逆に日本映画は観客を増やし始めた。このことは、ヒットしたマンガがあると、まずテレビドラマ化され、その後の映画化を考えるという流れだったものが、現在ではテレビと映画の両方に最初の映画化の機会が与えられるという状況に変化してきている。この傾向に基づいて、日本の映画制作の世界では、映画独自の物語を構成する脚本化の力が弱体化したことを指摘するのは一面的すぎるだろう。映画は、「映画独自の脚本から作られるべきである」というテーゼはどこにも存在しないからである。かつての映画史上の古典といわれる作品の多くが、文学を原作として依拠している事実も無視できない。むしろいえることは日本のマンガ文化の世界には、じつに多くの魅力的な「物語」が満ち溢れていることを示しているという肯定的評価があってもいいのではないかという点である。人間は、いつの時代も「物語」を必要としている。それは時として、時代の神話にもなりうる強いインパクトも内在している。「サザエさん」は、いつの日か、家族関係の理想像として「神話」になるかもしれない。そして、映像作家が「あるマンガを映画化したい」、つまり「動く絵にしたい」という願望を抱いたとき、彼にとってのマンガは、すでに映画づくりのための「絵コンテ」となって、そこにあるということに認めて良いのではないか。マンガは、言語メディアと絵画メディアのメディア・ミックスとしてその領域を拡大しつつある現在にあり、マンガをサブカルチャーとして不当に低く見るのは誤りである。アカデミズムは、マンガを決して軽蔑すべきではない。多くのマンガは、映像化のため

の魅力的な「絵コンテ」としてそこに存在し続けているし、そして多くの鑑賞者を納得させる映画を作ることの出来る映像クリエイターとの出会いを待っているのである。最近、その試みがかつとも成功した例としてあげられるのが「のだめカンタービレ」である。

4. マンガと映像の幸せな出会い

～テレビドラマ「のだめカンタービレ」～

2006年10月～12月に、フジテレビ系列で放映された「のだめカンタービレ」は、原作が少女コミックスである(原作者:二ノ宮知子、初版2003年)。売り上げ累計1900万部を超える人気漫画で、マンガを原作とする最近のテレビドラマの中で、最も成功した例といえよう。全11回の放映で平均視聴率18.9%という数字がそれを示している。

この作品は、ドラマ化に先立ち映画化して欲しいマンガ原作アンケートにも当然ながらすでに入っていた^(注7)。あとはヒロインの「野田恵」役に多くの読者の期待するイメージに反しない若手女優の登場を待つばかりとなっていた。原作の愛読者の一人である映画監督本広克行は2005年公開の「サマータイムマシン・ブルース」の撮影中、映画のヒロイン上野樹里のイメージがあまりにものだめのイメージに近かったことから、彼女を「のだめ」と呼ぶこともあったというエピソードは興味深い^(注8)。をさらに、このテレビドラマはクラシック音楽のCDの売り上げが伸びるという波及効果をもたらした。そして2006年末から、のだめと同時進行するかのようにヒットし始めた「千の風になって」という歌とあいまって、2007年春の時点においても、なおクラシックブームは続いている^(注9)。

次に紹介する新聞の番組批評は、この作品の特質をうまくついた良質の批評となっているので、全文引用する。「単行本の売り上げが1300万部以上と言う人気漫画をドラマ化した。世界観や一つ一つのセリフが原作に忠実に再現されている。「ドラマ化」というより「実写版」といいたくなる

ほどだ。主人公は、音大のピアノ科に通う“のだめ”こと野田恵（上野樹里）と千秋伸一（玉木宏）。音楽一家に生まれピアノは一流の千秋だが、飛行機が怖くて海外に行けないため、指揮者の夢に近づけず、不満を抱く。部屋はゴミだめ状態で奇行ばかりの彼女をうっとうしく思いつつも、天性のセンスが光るピアノの才能には一目置く。脚本も演出も独自性に乏しいが、それを批判する気がうせるほど、底抜けに楽しい。ワクワクしながらページをめくるようなテンポの良い展開、場面ごとに雰囲気がぴったりのクラシックの名曲に心踊らされる。個性豊かな登場人物の配役の妙と、期待にこたえる俳優陣にも感心した。口をとがらせながらピアノをたたく上野を見て、思わず「漫画とそっくり」と声を上げてしまった。」（『読売新聞』2006年10月16日からの引用）

マンガの作家には、商業的・経済的動機はともかくとして、自ら描いた世界を動くものとしてみてみたいという願望が少なからずあるはずである。少なくとも筆者がマンガ家ならそう願う。それは、本稿の冒頭でも述べたばらばらマンガと言う子供心をくすぐるものであり、自ら描いた画が動くという事はすばらしいことである。マンガ家がこの誘惑に勝てるはずがない。マンガの世界は何でもあり、である。つまり、作者の想像の翼はとどまるところを知らず、時として近未来的な、時として現実ではありえない空想の世界へと読者をいざなう。しかも、絵という画面付きで、あたかもそれは現代の紙芝居であるかのようなようである。それと同時に、言語芸術としての文学（活字メディア）では表現し得ないような様々な世界と描き手の独自の世界観を繰り広げて見せる。そしてアニメーションは最新のデジタル技術で効率的に作られるようになったとしても、マンガの1コマ1コマはまだ描き手の手作業にゆだねられている分だけ、作り手の体温が伝わってくるという、ある種の「ぬくもり感」がある。はたして、このように独自のメディア世界を形成するマンガが、映像化されるとなるとどのような問題が起きるか。まず、マンガの原作者がもっとも気になるのは主人公のイメージの問題であり、自分の作品のイメージに近いキャスティング

に出会えるかどうかは、自らの作品世界を破壊しかねない、大きな賭けでもある。その意味で、映像化の要件は次のようになるだろう。

- (1) 「マンガ原理主義者」(映像化について懐疑的な人間)に対して説得力を持つ事。これらの人々は、安直な映像化を望んでいないが、「原作の再現」、場合によっては、「物語の再構築」にこだわってうまくいった作品ならば評価する用意がある。
- (2) 原作者の独自の世界観・人生観を貫き、作品の空気感(テイストないし風味)を正確に理解する。(テレビドラマにありがちな、予定調和的な結末に安易に変更しない)
- (3) キャスティングの危険性: ミスキャストを極力回避する(その時々の人気俳優やアイドルと言った商業主義的要因に絶対にひきずられない)

「のだめカンタービレ」は仮説として掲げた上記の条件を見事に満たしてくれた稀有な例として特筆に値する。なお、このドラマは「週刊ザテレビジョン」(角川書店)主催の第51回「ドラマアカデミー賞」で計6部門を制覇し、「最優秀作品賞」および「主演女優賞」(上野樹里)などを獲得した。フジテレビ系ドラマの作品賞受賞は第50回の「結婚できない男」に続き21作目。「月9」枠ドラマの受賞は9作目で、2002年夏の「ランチの女王」以来の受賞となった。

(注7)「キネマ旬報」2006年 No1470(11月上旬号) p.52「ドラマでは何か微妙なので、映画でS オケを見たい。宮藤勘九郎さんに監督・脚本を…」

(注8)「本広本」225ページ参照。

(注9)「オーケストラを救えるか～深刻な財政危機～」<『クローズアップ現代』2007年1月17日・NHK 総合>

5. 人間はいつも『物語』に関心を持ち続ける

以前発表した「物語の構造(1)～(3)」でも繰り返し述べてきたように、人間がいつも「物語」に強く惹かれる証左として「物語の主人公は、何らか

のハンディキャップを持つ」という仮説をもう一度想起されたい。次に取り上げる番組の事例でも明らかのように、我々をひきつける物語の主人公は、何らかのハンディを持っていて、そのハンディの克服が物語の骨子となることは明らかであろう。『中学生モニターとテレビ製作者の対話』(2007年)という番組によれば、次の事が報告されている^(注10)。BPO 青少年委員会中学生モニター50人の 2006年4月から12月までの9か月間、どんな番組に関心を持ち、どのように評価しているか(369件のモニター報告)のアンケート調査であるが、時代の空気をいちばん強く反映するアンケート調査のひとつとしてその内容はとても興味深いものがある。以下では、簡単にそのデータを紹介する。まず、番組の視聴率ランキングは以下の通りである。

1位：14歳の母(ドラマ・日本テレビ) 2位：マイボス・マイヒーロー(ドラマ・日本テレビ) 3位：クロサギ(ドラマ・TBS) 4位：のだめカンタービレ(ドラマ・フジテレビ) 5位：NHKスペシャル(ドキュメンタリー・NHK) 6位：世界がもし100人の村だったら(ドキュメンタリー・フジテレビ) 6位：エンタの神様(バラエティー・日本テレビ) 6位：功名が辻(ドラマ・NHK) 9位：愛のエプロン(バラエティー・テレビ朝日) 10位：純情きらり(ドラマ・NHK) 10位：僕の歩く道(ドラマ・フジテレビ) 10位：ギャルサー(ドラマ・日本テレビ) 10位：ダンドリ(ドラマ・フジテレビ) 10位：ボクシング中継(2006年8月2日放送・スポーツ・TBS) 10位：太田光の私が総理大臣になったら...秘書田中(情報・討論・日本テレビ) 10位：あいのり(バラエティー・フジテレビ)。

番組内容の評価が高いランキング：1位：14歳の母(ドラマ・日本テレビ) 2位：マイボスマイヒーロー(ドラマ・日本テレビ) 2位：のだめカンタービレ(ドラマ・フジテレビ) 4位：世界がもし100人の村だったら(ドキュメンタリー・フジテレビ) 5位：クロサギ(ドラマ・TBS) 6位：NHKスペシャル(ドキュメンタリー・NHK) 7位：功名が辻(ドラマ・NHK) 7位：僕の歩く道(ドラマ・フジテレビ) 9位：少しは、恩

返しができたかな(ドラマ・TBS) 9位:誰よりもママを愛す(ドラマ・TBS) 9位:僕たちの戦争(ドラマ・TBS) 9位:アテンションプリーズ(ドラマ・フジテレビ)。

これらのデータは、中学生モニターは、ドラマをよく見ている、しかも評価の高いことを示している。テレビという映像文化の中で「物語」を楽しむジャンルとしてのドラマは、依然として多くの視聴者をひきつけている事を示すとともに、原作がマンガの事例が目立つ事も特徴になっている。ドラマの中心は、そのほとんどが人間ないし人間関係の『物語』である。中学生がテレビドラマを通して人間を学べるとすれば、「良質のテレビドラマ」という物語は、どんな哲学書よりも人間を学べる教科書にもなりうるといえるだろう。もちろんこのことは、世代や性別に関係なくすべての視聴者にもあてはまることでもある。「映画は人生の教科書である」という格言は、古いようでいて案外新しいものかもしれない。ここでは、物語論を少しはなれて、テレビ番組の別のジャンルについても、少し検討を加えておきたい。それは、いわゆる『科学情報番組』である。そこでは、我々の日常生活に密接に関わる医療と健康に関する情報が提供されている。そこで、問題は、その情報の真偽性である。

「食品科学情報エンターテインメント番組」^(註11)で、「納豆にはダイエット効果がある」という誰にでも記憶しやすい「短い物語(サクセスストーリー)」を語った途端に、翌日から全国のスーパーの納豆コーナーが空っぽになるという現象は、視聴率至上主義と、情報の受け手である視聴者をはじめから馬鹿にした作り手の戦略によるものだとしても、視聴者は絶えず何らかの「物語」を望んでいることの表われである。そして、番組が口あたりよく提供した情報どおりに実践すれば、自分もそのサクセスストーリーのヒーロー/ヒロインになれるかもしれないという潜在願望、あるいは納豆を食べる前の肥満の自己の身体が、粘り強く納豆を食べ続ける事により、見事にスリムになった自己の身体をあらかじめ想像するという、変身願望を強くくすぐった結果であると考えられる。こうした問題の背後に

は、「ナラティブ・ジャーナリズム」すなわち明確な実証性と客観性に支えられるべき科学情報に、行き過ぎた形での「物語」提示（この場合は「サクセスストーリー」の提示）という手法が潜んでいるものと考えられる。

その意味で視聴者は、フィクションとしてのドラマの中で語られる「物語」を楽しむスタンスと「(見かけの) 科学ジャーナリズム的エンタテインメント」を楽しむスタンスとを明確な区別できるメディアリテラシーを持つべきである。テレビを見た次の日にあわててスーパーに納豆を買いに走らないためにも。

(注10) (「中学生モニターとテレビ製作者の対話」<『土曜フォーラム・2007年・教育テレビ>

(注11) 「発掘！あるある大事典Ⅱ」のねつ造問題で、番組を製作した関西テレビは、28日午後10時から、新たな捏造を認めた7件について、放送法に基づく15分間の『訂正放送』を行った。放送では、関西テレビのアナウンサーが改めて謝罪。すでに訂正放送をした「納豆ダイエット」（1月7日放送）を除き「寒天で本当にヤセるのか!？」『2006年6月12日放送』など7件のデータ改ざん部分を説明し、訂正した。また、外部調査委員会から「不適切」と指摘された8件についても短く紹介した。同局は4月初めに、70分前後の検証番組を放送する。（『読売新聞』2007年3月29日朝刊・新潟）。関連映像資料⇒新聞で紹介されていた検証番組は、以下に示す日時で放映されたが、内容はきわめてひどいものであったことを付け加えておく。「私たちは何を間違えたのか～検証・あるある発掘大事典Ⅱ～」<2007年4月3日・NST>

6. 「じゅりすと」

～メディア・リテラシー教育の実践プロジェクト～

筆者は、昨年、法学部内で「じゅりすと」と命名された「メディア・リテラシー教育のワークショップ」を立ち上げた。今回の論考は、その最初の成果でもある。周知のように法学部教育の中で総合的な法律雑誌「ジュリスト」は、すでに社会的な役割が定着している。言うまでもなく「じゅ

りすと」はそれと肩を比べようという法律雑誌ではなく、「言語と映像」「映画・テレビ番組の映像批評」および「大学におけるメディア・リテラシー教育の実践報告」を含む映像の鑑賞と学生との討論を作業の中心としている。内容構成の主軸は、将来を渴望されている若手女優の一人である上野樹里(原稿執筆時点ですくなく20歳を迎えた)が出演した映画やテレビドラマに関する論評が中心となる。

女優として自己実現をめざす人間に特定のイメージや固定されたレッテル、つまり映画の中で強烈な印象を残した特定のイメージを付与されるのは、本人にとっては迷惑な話であるに違いない。それはさまざまなタイプの人間を「演ずる・模倣する」ことを生きがい(自己実現)とする職業であるからである。上野樹里が、他の若手俳優と大きく違っている点は、その「のびやかさ」である。のびやかさというのは人間の内面的性格のみならず、文字通り手足ののびやかさでもある。彼女は、映画の中でよく地べたをはいつくばるシーンを見せてくれる。(参照「スウィングガールズ」「虹の女神」「亀は意外と速く泳ぐ」「のだめカンタービレ」など)それは監督や演出の綿密な演技指導にもとづいて型にはまって要領よく演ずるというよりは、一回性のライブ感覚に溢れていて画面に一瞬の緊張感(具体的に言うと、カットのつなぎ目の一瞬)が生じる事により、演ずる役柄がより生き生きとあぶりだされてくる不思議さに満ちている。日本映画の俳優は、ともすれば型にはまった表情、やたら深刻ぶって、顔の表情に変化のない能面のような表情の役者があまりにも多すぎる。日本文化の宿命とも言える伝統的な『型』文化が、実は役者の演技にも相当色濃く反映しているというのが筆者の考えである。それがアジア人としての日本人の顔立ちの限界性なのかよく分からないが、少なくとも日本人が外国映画(主として欧米の)に魅力を感じたのは、俳優の表情の豊かさにも一因があったのではないか。その意味で、上野樹里は表情が大変豊かであるという点は注目していいだろう。彼女はクローズアップは言うまでもなく、画面の奥で小さく映っていても決して手を抜いていない点も好感が持てる。さら

に、彼女はその若さにもかかわらず、すでに汚れ役や憎まれ役（「ジョゼと虎と魚たち」）、またベッドシーンも難なくこなしてきている（「ジョゼと虎と魚たち」テレビドラマ「僕たちの戦争」／「YOSHI・翼の折れた天使たち」）。それは物語の必然性から要求される演技であるということが了解されているからこそ、なんら照れや怯（おび）えも見せないで演ずる事ができるのであろう。あるテレビディレクターは次のように語る。「<のためカンタービレ>で演じた天然系のキャラクターと、映画『虹の女神』で見た等身大のヒロイン。上野さんには、役柄によってまるで別人に見える稀有な才能があると思います。」^(註12)役柄によって、まるで別人に見えるということ、どちらかと言うと役柄の固定したイメージの俳優が多い中で、まさにこれは稀有の才能であることに筆者も全く同意見である。これからの映画の作り手は、上野樹里がこれまで出演した映画・ドラマで作ったイメージを単純になぞらえることなく、全く新しいイメージを作り出して欲しいものである。さらに、上野樹里は、日本映画の中でおそらく数年に一人出るか出ないかのコメディアーを演じられる天性の素質を持っているのではないかと思う。「コメディエンヌ」という言葉は、日本社会ではあまり大きな価値を認められていないが、コメディアーというのは決して「ドタバタ喜劇」ではない、もちろんスラップスティック性はコメディアーの重要な構成要因であることは認めるが、コメディアーは『笑い』を通して人間世界を深く考察する一つの手がかりを提供する表現ジャンルである。チャップリンが映画史の中で偉大な喜劇王として不朽の名声を保ち続けるとき、それは特定の時代や特定の国の文化の潮流に限定された単なる一過性の憂さ晴らしでないことを如実に示しているといえよう。「コメディエンヌと呼ばれることはいいことかなと思う」という本人の発言も注目しておきたい^(註13)。映画「笑う大天使（ミカエル）」に関する文献の中で上野樹里は次のように語っている。Q：今後どのような女優としてステップアップしていきたいですか。A：監督さんやプロデューサーさんから見て料理しがいのある、意外性のある女優になりたいですね。どんな役を演じてもいい

つも同じというのではなく、いろんな顔を持てるようにしたいです。今回もそうですが、新しい役に挑戦すると、自分でも気がつかなかった一面に気づかされます。そうした事を通じて、女優として人間として、少しずつ成長していきたいですね。」^(注14)あるテレビ雑誌によると、「あのマンガをこの俳優でドラマ化してほしい」というアンケートに28歳のライターが、浦沢直樹のSF的要素の強い『20世紀少年』を取り上げ、登場人物のケンヂをユースケ・サンタマリア、カンナを上野樹里、キリコを桜井幸子にしてドラマ化してほしいと述べている。果たしてこれは実現可能か、あるいは上野樹里の芸域の新たな展開となるか。映像芸術は案外ちょっとしたきっかけから具体化されることもあるから、今後に期待するでしょう。こうしたアンケートによれば、我々がマンガを見るとき、そこに実在の俳優による映像化というイメージの楽しみが付加されるという事が分かる。女優・上野樹里は、これまでの出演した映画をみると、じつに彼女を取り巻くスタッフに恵まれていたと言えるし、バラエティーに富んだ役柄を演じてきた。そして、それらの多くはのびやかなコメディエンヌの片鱗を見せていた。そして、スタッフの要求する演技に應えていたというのは、やはり彼女の演技者としての天賦の才能ゆえであろう。そして、これからもさまざまな映画監督と出会い、我々が想像もつかなかったような潜在的可能性を、あくまでも伸びやかに開花していくことを強く期待したい。

繰り返しになるが、映画の原作が文学作品であれ、マンガであれ、すべての読者の納得するイメージはそもそも存在し得ない。原作のキャラクターに外面的に似ていることは最小限の条件であるにせよ、俳優は念入りにメーキャップされた「着ぐるみ」ではないのだから、やはりそこに血の通った人間が演じられてこそ、実写化されることの意味があり、我々映画の観客は、俳優に固定したイメージの反復を求めることなく、俳優の人間解釈の成果を楽しみ、良かった点は評価し、悪かった点は客観的に批判し、そして励ましたりもするという形での、より主体的な「メディア・リテラシー」トレーニングをしていかなければならない。それは、単に自分のお

気に入りの俳優の潜在的可能性を、ひいきの引き倒しでだめにしないためにも必要である。いずれにせよ、『物語』—それが伝えられるメディア（媒体）がマンガであれ、映画であれ、あるいはテレビドラマであれ、『物語』の中で我々が個々の日常では起こりえない様々な人間の生き様を、登場人物に感情移入しながら疑似体験していくことにより、それだけいっそう我々の平凡な人生は豊かに増幅されていくことだけは間違いない。

（注12）「NHK ウィークリー・ステラ」2007年2月16日号、上野樹里インタビュー。

（注13）「新潟日報」2007年1月1日の特集記事。

（注14）「映画・笑う大天使・オフィシャルフォトブック」白泉社、2006年。

7. 上野樹里のプロフィールとフィルモグラフィ

1986年5月25日、兵庫県加古川に生まれた上野樹里は、2001年クレアラシル『フェイスウォッシュ』のテレビコマーシャルで注目を集め、NHK朝の連続テレビ小説「てるてる家族」の三女・秋子役で全国区の人気を獲得する。映画は「チルソクの夏」「ジョゼと虎と魚たち」を経て、大ヒット作「スウィングガールズ」に主演。日本アカデミー賞新人賞を始め、数多くの賞を受賞したこの作品で一躍ブレイク。個性派演技人の中に混じっても引けをとらない独特の存在感とオーラには定評があり、日本映画界の次世代をになう正統派女優として大きな注目を集めている。主なく受賞歴は以下の通りである。◆第28回（2005年）日本アカデミー・新人俳優賞受賞（「スウィングガールズ」）◆第59回（2005年）毎日映画コンクール・スポニチグランプリ新人賞受賞（「スウィングガールズ」「チルソクの夏」）◆第26回（2005年）横浜映画祭・最優秀新人賞受賞（「スウィングガールズ」「ジョゼと虎と魚たち」「チルソクの夏」）◆第51回（2007年）ドラマアカデミー賞・主演女優賞（「のだめカンタービレ」）以上の受賞データは、

「DVD版：亀は意外と早く泳ぐ・解説資料」および「週刊ザテレビジョン」の掲載記事を参考にした。相次ぐ映画・ドラマの出演やテレビCMなどで、しだいにマスメディアへの露出度を高めていく上野樹里であるが、ドラマ「のだめカンタービレ」の劇中歌として歌われた「おなら体操」がCD化されるとのことである。「元気に出そう！いい音出そう！」など、コミカルな歌詞とリズムが話題となり、視聴者からリリースを望む声が殺到した。やがて全国の幼稚園や保育園で、この曲が聴かれることになり、それを聴いて育った幼児たちにとっては、単に「おなら体操のおねえさん」という存在にすぎなかったのが、やがて数年後には、演技の上でも円熟期に達するであろう映画やドラマを通じて上野樹里を再発見することになるだろう。



<出演作品(フィルモグラフィ)：映画とテレビドラマ>

「チルソクの夏」<2003年> 「半落ち」の佐々部清監督が、1977年の下関を舞台に日本の女子高生と韓国の少年との純粋な初恋を描いたラブ・ストーリー。高校生・郁子は、親善陸上競技会のために韓国からやってきた少年と出会う。同じ出場競技だったこともあり、互いにひかれ合った2人は、七夕(韓国語でチルソク)の日に翌年の夏の再会を約束する。そして78年の夏、再び下関の港に釜山の高校生を乗せた船が到着する。〔製作〕白井正明〔監督・脚本〕佐々部清〔撮影〕坂江正明〔音楽〕加羽沢美濃〔出演〕水谷妃里、上野樹里、桂亜沙美、三村恭代、山本譲二他。

「ジョゼと虎と魚たち」<2003年 原作：田辺聖子 脚本：渡辺あや 監督：犬童一心、音楽：くるり・主題歌『ハイウェイ』。出演：妻夫木聡・池脇千鶴・上野樹里他> 恒夫(妻夫木)は麻雀屋でアルバイトする学生。麻雀屋での最近の話題は、近所に出没するお婆さん。お婆さんはいつも乳母車を押して歩いており、中身は大金か麻薬か、と客達は噂していた。ある日、恒夫は坂道で乳母車と遭遇。中を覗くと包丁を振り回す少女(池脇)がいた。それが恒夫とジョゼとの出会いだった。おばあさんは、足が不自

由で歩けない孫のくみ子を乳母車に乗せて散歩に連れ歩いていたのだった。くみ子は、フランソワーズ・サガンの小説から取った名前ジョゼと、恒夫と呼ばせる。エキセントリックな性格のジョゼに恒夫は次第に惹かれていくが、恒夫の恋人の香苗（上野）はそんな障害者のジョゼに激しく嫉妬する。

「スウィング・ガールズ」<2004年 監督：矢口史靖（しのぶ）。共演：貫地谷しほり他> 舞台は東北の片田舎。夏休み返上で補習授業を受けている女子高生たちが、サボりの口実としてビッグバンドを始める。当然のごとくやる気はゼロ。しかし、楽器から少しずつ音が出てくるにつれてジャズの魅力に惹かれ、ついには本気でバンド結成を決意。とはいえ楽器はないし、お金もない。バイトをすれば大失敗。何とか中古楽器を手に入れていざ練習と思いきや、今度は練習場所も追い出され、ついにはバンド解散の危機。波乱だらけの展開から感動のラストまで一直線。物語の中心的存在となるトラブルメーカー的存在の女子高生・鈴木友子役が上野樹里に決まるまで、オーディションには難航をきわめたという。

「亀は意外と早く泳ぐ」<2005年 監督：三木聡 共演：蒼井優・岩松了他> 何をやっても目立たない平凡な主婦が、「スパイ募集」の張り紙を発見。脱平凡を期して面接に向かうと、その平凡さこそスパイに最適と絶賛されて採用決定。しかしそのミッションとは、目立たないように静かに平凡に過ごす事だった。監督は、シティボーイズ・ライブの作・演出や「ダウンタウンのごっつええ感じ」「トリビアの泉」など人気バラエティ番組の構成を手がけてきた才人・三木聡。「イン・ザ・プール」に続く劇場公開第2作となった本作は、他愛ない「小ネタ」が随所に織り込まれ、洒落たセンスと絶妙なゆるさが作品の個性を高めているオフビートな脱力系ムービー。エンディングの音楽となるレミオロメンの「南風」はゆるい世界をさわやかに締めくくる。

「サマータイムマシン・ブルース」<2005年 監督：本広克行 共演：瑛太・真木よう子・ムロツヨシ・永野宗典・佐々木蔵之助他> とある地方

大学。SF研究会の甲本（瑛太）たちサエない男子学生5人組は、夏休みだというのに部活そっちのけで草野球に興じていた。そんなある日、彼らは部室に備え付けられたエアコンのリモコンをうっかり壊してしまった。その上、あまりにも旧式でメーカーでもリモコンの修理ができないというのだ。翌日、途方にくれる学生たちが部室に顔を出すと、そこには不思議な機械が置かれていた。メーターパネルを見ると、どうもそれはタイムマシンらしい。半信半疑の冗談半分で、彼らは壊れる前のリモコンを取るために、仲間の一人を昨日に送り出すのだが、勝手に過去を変えるとどういうことになるのか、SF研の彼らは知らなかった。タイムスリップ映画には、お決まりの『タイムパトロール（神様）』の登場の仕方にユニークな工夫が凝らされている。

この映画は、2001年に若手劇作家上田誠の率いる「ヨーロッパ企画」の第8回公演として上演され、練りに練った脚本と軽快な会話で熱い注目を集め、その2年後には第13回公演として「サマータイムマシン・ブルース2003」を上演。多くの観客が詰めかけて話題を呼んだ。そして俳優の佐々木蔵之助に勧められて東京公演を見た本広克行監督（代表作「踊る大捜査線・レインボーブリッジを封鎖せよ」「交渉人真下正義」）が注目。原点に戻って自分の好きな演劇とのコラボレーションを望んでおり、それと同時にタイムマシンをテーマにした映画を作りたいという構想を抱いていた本広監督は自らプロデューサーもかねて映画実現に乗り出す。制作に当たっては、ステージを手がけた上田誠自身に脚本を委託し、2005年映画化されることになる。

「笑う大天使（ミカエル）」<2005年 監督：小田一生 共演：伊勢谷友介・関めぐみ・平愛梨他> 主人公城史緒(上野)は、突然母をなくし、生き別れになっていた富豪の兄と再会、心ならずも聖（セント）ミカエル学園に転校してきた。そこは「ごきげんよう」の挨拶に礼儀作法、ゆったりとした雰囲気、漂う全く別世界の超お嬢様ワールドだった。しかし、同じ『猫かぶり』のお嬢様である斉木和音と更科柚子に出会い意気投合し、

「チキンラーメン」という超大衆的グルメや「麦チョコ」を学園の中でこっそり隠れ食いする仲間となる。同じ頃、お嬢様たちを狙った誘拐事件が多発するという物騒な中、学園では恒例のガーデンパーティーが始まるが。原作は川原泉の人気マンガ。

「出口のない海」<2006年 原作：横山秀夫 監督：佐々部清 共演：市川海老蔵他> 甲子園の優勝投手・並木浩二は、大学進学後に肩を痛めて自慢の速球が投げられなくなり、エースの座を失ってしまう。それでも野球への情熱を燃やし続ける並木だったが、世界は戦いの時代を迎えようとしていた。ついに日米開戦、太平洋戦争が日ごとに激しさを増していく中、愛する家族や友、そして恋人と別れて海軍に志願する並木。そこには彼と同じく大切な人を守るために戦うことを決意した若者たちがいた。日本の敗戦が日に日に濃厚になっていく中、海軍は最後の秘密兵器『回天』を開発、やがて脱出装置のない定員1名の回天に乗って敵艦に激突するというこの究極の任務についた若者たちは自らの進む道を迷い、怒り、悲しみながらも、明日への希望、愛する者への思いを胸に秘め、そしてついに出撃の時が訪れる。上野樹里は、市川海老蔵の恋人役として出演。

「虹の女神」<2006年 監督：熊澤尚人 共演：市原隼人・蒼井優他> 数多くの名作を生み出した岩井俊二（「リリイ・シュシュのすべて」「ユリイカ」）が自分の作品以外で初めてプロデュースした作品。大学の映画研究会を主な舞台にした青春群像劇。原案は脚本にも参加した作家の桜井亜美。ヘビーな現実をサバイブする少女たちの代弁者として圧倒的に支持される彼女が、本作で新しい世界を切り開いた。監督は、『スワロウテイル』のメイキングプロデューサーも務めた熊澤尚人（『ニライカナイからの手紙』）。役者の持ち味を引き出し、エモーショナルで美しい青春映画を作り上げた。主演として市原隼人が5年ぶりに岩井ワールドに参加。優柔不断で鈍感だがどこか憎めない主人公の智也を魅力的に演じている。ヒロインのおおいには、作品ごとに違った陰影を見せる上野樹里。ピュアでまっすぐな個性を存分に生かしながら、この役に生命力を吹き込んだ。また目の

不自由なあおいの妹・かなには蒼井優。若手俳優の中でも随一の実力を誇る彼女が、あおいと智也の思いをつなぐ存在として物語に奥行きを生み出している。

「幸福(しあわせ)のスイッチ」<2006年 監督・脚本：安田真奈 出演：上野樹里・沢田研二・本上まなみ他> 和歌山の田舎町の電気屋で儲けにならない仕事ばかりを引き受けた挙句、苦勞を背負い込んだ母親は早くに他界。そんな父に反発し、単身東京へ飛び出した怜(上野樹里)だったが、思うようにいかない仕事にいつもイライラ。とうとう会社も自主退社してしまった矢先に、妹から一番上の姉が絶対安静で入院したという知らせが入る。大慌てで帰郷すると、姉は単なる妊娠、骨折で入院していたのは疎遠になっていた父親だった。仕事一筋の頑固親父と、それに反発していた意地っ張りな次女・怜を中心に家族の絆を描く。ちなみに父親役の沢田研二は、かつてアイドル歌手の時代には「ジュリー」と呼ばれていた。家電メーカーに勤めていたこともある新人の安田真奈監督が「ニュースになる社会の大事件より、日常の大事件を描きたい」と、実体験に基づいて作り上げた。大学時代から映画を撮り続けてきた安田監督だが、「広い視野を持ちたい」とメーカーに就職。2002年に退職するまで9年半の間、OL生活をする傍ら、年1～2本のペースで映画を製作してきた。

「7月24日通りのクリスマス」<2006年 監督：村上正典 出演：大沢たかお・中谷美紀他> 2005年のヒット映画の一つ「電車男」のスタッフが再び結集し、ヒロインのエルメスを演じた中谷美紀が逆電車男とも言うべき、地味で恋に臆病な主人公・小百合に挑戦する。自分に自信のない女性が憧れの人と恋をしたいと決意するまでをつづった芥川賞作家・吉田修一の小説「7月24日通り」(新潮社)を大胆にアレンジし、コメディの要素を加え映画化した作品。妄想癖のあるジミでダサイヒロインの小百合に中谷美紀、彼女のあこがれの先輩・聡史に大沢たかお。小百合の弟・耕治(安部力)の恋人メグミ(上野樹里)は、まるでクリスマスの飾りつけ前のモミの木のように、自分に輪をかけたような地味な女で、小百合の苛立

ちは次第に募っていく。

<テレビドラマ>

「生存・愛する娘のために」2002年2月11日放送開始・NHK総合テレビ・4回シリーズ。実質的には上野樹里の女優としてのスタートを切った作品。撮影当時は中学3年。原作：福本伸行・川口かいじ『生存～LIFE～』、脚本：青柳裕美子（第1・2回）森脇京子「第3・4回）。演出：大森青児。大手商社の専務で次期社長と目されていた武田（58歳・北大路欣也）は、悪性腫瘍と診断され余命3ヶ月と宣告される。武田には妻（富田靖子）と娘（上野樹里）がいたが、皮肉にも妻は10年前に自分と同じがんで死亡、そして娘の佐和子は、家庭を顧みない父親に反発して、14年前高校1年生の時に家を出たまま失踪する。企業戦士として会社での成功をつかんできた武田は、仕事を理由に娘を放任し、失踪後も真剣に探そうとしなかった。武田は家族への後悔と死の恐怖から逃げるため、自ら死を選ぼうとする。だが、そのとき一本の電話が入る。殺され埋められた娘・佐和子の白骨死体が発見されたという知らせであった。

「てるてる家族」<2003年10月～2004年3月放送・全150話・NHK。主演：石原さとみ> 昭和30～40年代の大阪を舞台にしたホームコメディ。四姉妹の末っ子・冬子の目を通して、製パン店を営む家族の夢と幸せを描いていく。ヒロインの岩田冬子（石原さとみ）は、長女・春子（紺野まひる）、次女・夏子（上原多香子）、三女・秋子（上野樹里）を姉に持つ、四人姉妹の末っ子。両親が製パン店を営む池田駅前で暮らしている。いつも明るい岩田家の物語は、母・照子（浅野ゆう子）と父・春男（岸谷五朗）の新婚時代にさかのぼる。原作：なかにし礼、脚本：大森寿美男、演出：榎戸崇泰、語り：石原さとみ。

「オレンジデイズ」<2003年9月～2004年3月放送／全11話／TBS／主演：妻夫木聡・柴咲コウ他> 「テレビドラマのラブストーリーの名手である北川悦吏子が、2年ぶりに連続ドラマの脚本を手がけた。オレンジ色の綺麗な夕焼けに輝く青春の日々を甘酸っぱく描く。就職活動が芳しくな

い大学4年の結城權(妻夫木)。ふと、大学キャンパスの片隅から響くバイオリンの音色に吸いつけられていく。音の主は萩尾沙絵(柴咲)。權の視線に対するぶっきらぼうな反応が面白くなかったが、なぜか權の心にひっかかるものがあった。そんな二人が、ひよんなことから遊園地でデートすることになる。実は沙絵は、4年前に聴覚を失い、心を閉ざす日々を送っていた。沙絵の素直ではない態度に戸惑う權だが、同情ではない何かを感じ始める。二人の友人を含め、今どきの若者の悩みや喜びがストレートに伝わる青春群像が期待できそうだ。ただその展開に果たして障害者が必要だったのか、唯一、引っかかりを感じる。」(引用：『朝日新聞』2004年4月11日)

「さよなら小津先生」<2004年11月26日・NST・フジテレビ系列> 2001年に放送されたドラマのスペシャル版である。田村正和が、銀行員から高校教師に転じた小津南平を演じている。男子バスケット部の顧問を離れ、優雅な日々を過ごしていた小津先生が、今度は女子バスケット部の顧問になる。部員は一筋縄ではいかない生徒ばかり。小津のベッドに深夜潜り込んできたり、援助交際をしたり。たった一人、頼りになりそうだった生徒も突然学校をやめると言い出す。次から次に起きる難問を、小津先生は手際よく解決していく。田村の演じるキャラクターには、古畑任三郎のイメージが色濃く反映されてしまいがちであるが、この作品では、どことなくつかみ所のない性格が、逆に、物語の背後にある現実の社会問題をリアルにあぶりだすことに成功している。上野樹里は「スウィング・ガールズ」で共演した貫地谷しほりとこのドラマでも同じ高校生役で共演している。先立つ映画「スウィング・ガールズ」で、主人公のトラブルメーカー鈴木友子役を演じて強烈な印象を残した上野であるが、このドラマでは、まったく違った表情を見せており、すでに芸域の幅の広さの片鱗を覗かせているといっても過言ではない。

「やがて来る日のために」<2005年5月6日放送・NST(新潟総合テレビ)原作：山田太一・演出：堀川とんこう・主演：市原悦子> 「人間は

みな平等である。必ず死ぬという一点に限って。だれもが、いつか「やがて来る日」を迎える。そのとき、私たちは目を閉じて何を思うだろうか。そんなことを考えさせられるヒューマンドラマだ。美代（市原悦子）は訪問看護婦として、死を目前にした患者たちの自宅療養を支えている。同じ看護師の雪（星野真理）は、余命いくばくもない18歳の恵美（上野樹里）への治療方針に反発して病院をやめ、美代の働く「訪問看護ステーション」に籍を移す。由紀は、美代と共に恵美の在宅医療に全力を尽くす。美代や由紀がほかに担当するのは、一度倒れて以来、妻が口をきいてくれないとこぼす野口（神山繁）や、商売が軌道に乗ったからと手術を拒否する典子（吉田日出子）ら。死を目前にした恐怖や、時にあきらめに似た心情を美代らにこぼす。脚本の山田太一は、患者や美代たちの揺れ動く心を柔らかく、丹念に描く。登場人物すべてに感情移入できる完成度の高い作品だ」
＜『読売新聞』2005年5月6日より引用＞このテレビドラマは、全国紙4紙および地元新聞の全てで同日に番組批評が書かれるという筆者の知る限りでは年に数回あるかないかのことである。それぞれの批評を丹念に比較すると、そこには批評としての温度差、あるいは執筆の力点の置き方により、微妙に番組のイメージが違ってくるのが分かる。映画やテレビの脚本力が低下しているといわれる昨今であるが、テレビドラマの脚本家・山田太一の筆の力は未だ健在である事を証明する一作である。そしてこのドラマの完成度を高めているのは、演出の堀川とんこうが、テレビという映像フレームの特性を熟知しているからでもあろう。

「エンジン」＜2005年4月～2005年6月放送・全11話／CX。主演：木村拓哉＞木村拓哉のほぼ1年ぶりの連続ドラマ出演だ。視聴者の圧倒的な関心は『今度はどんなキムタクなのか？』に尽きるだろう。神崎次郎（木村）はF3000のセカンドドライバー。独力ではい上がってきた。チーム内のトラブルでクビになり、5年ぶりに帰国、再就職のつなぎのつもりで、元小学校教頭の父親猛（原田芳雄）が運営する児童擁護施設に戻り、12人の子供たちと暮らし始める。2歳から18歳の高校3年の少女（上野樹里）

まで、どの子も親の愛とは疎遠だ。海外で手痛く挫折したもののレーザー復帰を目指す神埼が大人への不信感を抱く子供たちと触れあうことで、自らのあり方や可能性を見出していく。子供たちにコケにされながらも一生懸命に立ち向かう次郎役の木村が新鮮。子役と闘うスターだ。」(引用：『朝日新聞』2005年4月18日)

「金田一少年の事件簿・吸血鬼伝説殺人事件」<2005年9月放送・2時間ドラマ・日本テレビ・主演：亀梨和也> 「名探偵・金田一耕助」の孫が難事件を解決するドラマが、配役を一新して4年ぶりに復活した。堂本剛、松本潤に続いて3代目金田一少年を演じるのは、亀梨和也だ。原作は天樹征丸・さとうふみやの人気漫画。金田一一(はじめ)は、幼馴染の美雪(上野樹里)や警視庁の剣持警部(加藤雅也)らと、吸血鬼伝説が残る山間の廃屋風ペンションに宿泊する。宿泊客が次々と殺され、美雪に犯人の疑いがかかった事から、一は捜査に乗り出す。今回は原作と違い、まだ自分の才能に気づいていないが事件に初めて挑む、という設定。決意を込めて発する『ジッチャンの名にかけて!』の決めゼリふが聴きどころだ。篠井英介ら、脇にも味のある俳優が顔を揃え、見ごたえある推理劇に仕上がっている。」(『読売新聞』2005年9月25日)

「YOSHI 翼の折れた天使たち・スロット」<2006年3月2日・NST(フジテレビ系列)・45分> YOSHI原作によるドラマシリーズ第4夜「スロット」。愛されたいと願う女性の元に、恋人と他の女性との間にできた子どもが託される。脚本：半沢律子、演出：平井秀樹。涼子(上野樹里)は、毎日パチスロに通い、それで生活しているいわゆる「スロプロ」。両親に捨てられて施設で育った涼子は、誰かに愛されたいという気持ちが人一倍強く、それがかえって彼女の男性運を悪くもしていた。そんな涼子が現在交際しているのがホストの健二(須賀貴国)。ある日良子が目覚めると部屋に健二の姿はなく、代わりに健二が別の女性に生ませた健太という男の子がいた。一週間だけ預かってくれと言う健二の置手紙があった。

「僕たちの戦争」<2006年9月17日・TBS系・原作：萩原浩、脚本：山

元清、演出：金子文紀、出演：森山未来・内山理名・玉山鉄二・古田新太・麻生祐未・樹木希林他> 2005年、サーフィンをしていたフリーターの健太（森山未来）と、昭和19年、訓練飛行中の霞ヶ浦航空隊訓練生・吾一（森山未来＝2役）が、時を越えて入れ替わってしまう。やがて意識を取り戻した健太は、介抱してくれたキヨ（樹木）と孫の文子（内山）の会話から、自分が太平洋戦争中にタイムスリップしたと知る。一方、現代の病院で目覚めたものの失語症になった吾一を、健太の父・勝利（古田）と母・紀子（麻生）、恋人ミナミ（上野）は記憶喪失になったと思い込む。健太と吾一は、自分たちの時代に戻れないまま、それぞれの時代で生きる事になったが。

「**のだめカンタービレ**」<2006年10月～12月放送・全11話・フジテレビ・出演：玉木宏・瑛太・小出恵介・水川あさみ他> 「単行本の売り上げが1300万部以上と言う人気漫画をドラマ化した。世界観や一つ一つのセリフが原作に忠実に再現されている。「ドラマ化」というより「実写版」といいたくなるほどだ。主人公は、音大のピアノ科に通う“のだめ”こと野田恵（上野樹里）と千秋伸一（玉木宏）。音楽一家に生まれピアノは一流の千秋だが、飛行機が怖くて海外に行けないため、指揮者の夢に近づけず、不満を抱く。部屋はゴミだめ状態で奇行ばかりの彼女をうとうとうしく思いつつも、天性のセンスが光るピアノの才能には一目置く。脚本も演出も独自性に乏しいが、それを批判する気がうせるほど、底抜けに楽しい。ワクワクしながらページをめくるようなテンポの良い展開、場面ごとに雰囲気ぴったりのクラシックの名曲に心踊らされる。個性豊かな登場人物の配役の妙と、期待にこたえる俳優人にも感心した。口をとがらせながらピアノをたたく上野を見て、思わず「漫画とそっくり」と声を上げてしまった。」（『読売新聞』2006年10月16日より引用）

「**ハイビジョン特集：輝く女・上野樹里**」<2007年2月13日・NHK・ハイビジョン放送・110分> 今をとときめく第一線の女性、各界のトップをゆく女性、その名を聞けば誰もが素敵と思い、でも素顔は見たことがない

不思議な輝きを持つ女性、そうした「輝く女」の「輝く」本当の理由を探し、彼女たちの素顔に迫るシリーズ。華やかな世界で活躍する「輝く女」を撮るのは女性ドキュメンタリーディレクターたち。ある期間密着し、「輝く女」のさりげないしぐさ、会話、表情をつぶさに110分描き、彼女たちが「輝くわけ」を探っていく。第1夜は南海キャンディーズの「しずちゃん」、第2夜は「MEGUMI」。第3夜は上野樹里。映画「スウィング・ガールズ」でブレイク。普段着の演技で「脱力系ヒロイン」を演じ2006年だけで主演映画は4本の活躍。テレビドラマ(『のだめカンタービレ』)の撮影が終わり、念願のイギリスへ旅行に出る。中学生でモデル、15歳で上京、一人暮らしで高校に通いオーディションを受ける日々。役柄にはどれも真剣勝負。そんな時、ある本に描かれたイギリスの風景に出会う。死んだ少年がこの世に戻ってくるファンタジー小説「青空のむこう」の原作者アレックス・シアラーとの出会い。吹きわたる風、なだらかな丘…そのむこうに一体なにがあるのか。何を思い旅するのか、彼女の念願の旅に密着したルポルタージュ。

「冗談じゃない!」TBSは4月クールの日曜夜9時枠で、織田裕二主演の新ドラマの製作を決定した。「ラストクリスマス」(2004年フジ系)以来、約2年半ぶりの連続ドラマ主演となる織田が、本格的ホームコメディに挑戦。織田演じる40歳の会社員・高村圭太と20歳年下の新妻、その母親であり圭太のかつての恋人という3人の、波乱に富んだ同居生活を描く。圭太の妻・絵恋(えれん)役は上野樹里、絵恋の母・理衣(りえ)役は大竹しのぶが演じる。2007年4月15日から放映開始。初回視聴率は19.4%(「ザ・テレビジョン」2007年第19号による)



関連映像およびテレビ番組:

「フィルム・ビフォー・フィルム」<1985 原題: Was geschah wirklich zwischen den Bildern?>ドイツを代表する実験映画作家ヴェルナー・ネクスが長年にわたって収集した貴重なコレクションを基にして、映画の<前史>を解説したきわめて啓発的なドキュメント・フィルム。ネクスは、映画史家と

して、また映画以前の装置・玩具のコレクターとしても知られ、多くの映画祭や研究学会で上映・展示され評価を得ている。(スタンダード/カラー 83分)
 「科学の目が見た国宝“伴大納言絵巻”」<『新日曜美術館』2006年10月15日・NHK 教育テレビ・45分>

「絵巻・視覚の迷宮」<『新日曜美術館』2006年4月23日・NHK 教育テレビ・45分>

「国宝百選」<2003年1月5日・NHK 衛星第2放送・240分>

「よみがえる合戦図～平治物語絵巻・デジタル復元」<『新日曜美術館』2004年1月25日・NHK 教育テレビ・45分>

「アートエンタテインメント・迷宮美術館」<2007年2月11日・NHK 衛星第2『特集：鳥獣戯画』・60分>

「奇跡のエンタテインメント：国宝“信貴山縁起絵巻”の大世界」<2007年1月2日・NHK・90分>

「出口のない海・メイキング」<2006年9月19日・NT21・25分>

「のだめカンタービレ・メイキング」<2006年10月16日・新潟総合テレビ(NST)・55分>

「僕たちの戦争・メイキング」<2006年9月17日・新潟総合テレビ(NST)・55分>

「虹の女神・メイキング」<2006年10月14日・NT21・25分>

「7月24日通りのクリスマス・メイキング」<2006年11月11日・NT21・25分>

「舞台『サマータイムマシン・ブルース』」<『芸術劇場』2006年12月3日・NHK 衛星第2・150分> 作・演出：上田誠、2005年9月、イムズホール(福岡市)でのいわゆる2005年版の上演を放送したもの。

「おでんくん」原作：リリー・フランキー、現在教育テレビ毎週金曜日午後6時からの「天才ピット君」の中で放映中である。なお、年に数回程度総集編が放送される。

「のだめカンタービレ」2007年1月から放映中のアニメーション(放映回数未確認)。月曜9時のドラマ「のだめカンタービレ」が2006年12月に終了した後、同じフジテレビ系列で放送が開始された。

「オーケストラを救えるか～深刻な財政危機～」<『クローズアップ現代』2007年1月17日・NHK 総合・27分>クラシックが題材のコミックは1500万部、CDは売上100万枚を超える空前のクラシックブームの一方で、経営危機に陥る地方のオーケストラが相次いでいる。大阪フィルハーモニー交響楽団では、財政難を理由に自治体の補助金が削減され、楽団員のボーナスを大幅にカット。累積債務は2億円に迫ろうとしている。慢性的な赤字に悩むニューフィルハーモニーオーケストラ千葉では、労使交渉で賃金35%カットの提案が出され、労使交渉は難航、存続の危機に直面した。経営危機の背景には、財政赤字を抱える

自治体が軒並み、文化予算を切り詰めていることがある。オーケストラはもともとチケット収入だけでは維持できない構造的問題を抱えており、自治体や企業の経済的支援なしには成り立たないからだ。こうした中、独自にスポンサーを探したり、徹底的な地域密着の活動で生き残りを模索するオーケストラも現れた。番組では、苦境に陥るオーケストラの実情を追い、文化政策のあり方を考える。(No2352) スタジオゲスト：屋太一(作家)(番組のホームページを引用)。

「好調!日本映画～復活は本物か～」<「クローズアップ現代」2007年2月12日・26分>昨年、興行収入10億円以上のヒットが30本を超えた日本映画。21年ぶりに国内興行収入で洋画を上回るなど活況を呈している。そこには様々な戦略があった。大手映画会社などを中心に生まれる50億円を超えるメガヒットを支えているのは、徹底的に客の意見を取り入れた客本位主義の映画製作。また独立系の映画会社は、独自の資金調達やPR戦略で作品性を重視しながら興行収入を確保するシステムを構築した。一方でハリウッドに進出し、全米興行収入第一位に輝いた日本人プロデューサーも出現。日本のオリジナリティーを全面に押し出す映画作りで高い評価を得ている。オリジナリティーこそが更なる日本映画飛躍の鍵だという。好調日本映画を支える戦略に迫る。スタジオゲスト：鈴木敏夫(映画プロデューサー(番組のホームページを引用))。

「山あいの町がスウィングする～長野蓼科高校ジャズクラブ青春記」<『にっぽん再発見ハイビジョンふるさと発』2006年4月16日・50分>浅間山を望む標高700mの山あいに位置する長野県立科町。この町の人々の心には、いつもジャズが流れている。その音楽を奏でるのは、蓼科高校ジャズクラブの生徒たちだ。部員33人のうち、32人が女の子で男の子は1人だけ。7年前、廃部寸前だった吹奏楽部を、一人のジャズ好きの教師がジャズクラブとして復活させ、いまでは町の看板として夏祭りや敬老会のイベントなどに欠かせない存在になった。2年前、映画「スウィング・ガールズ」のモデルにもなったこのジャズクラブ。部員たちの最大の目標は、1月に東京で開かれる国内最大の学生ジャズ・フェスティバルでの演奏だ。

「中学生番組モニターとテレビ製作者の対話」<『土曜フォーラム』2007年2月17日・教育テレビ・70分>NHKスペシャル番組チーフプロデューサー…原神琢、日本テレビ制作局ドラマ制作部長…井上健、TBSテレビ編成局編成部次長…合田隆信、フジテレビ情報制作センター副部長…宗像孝、テレビ朝日編成制作局統括担当部長…植村真司、テレビ東京制作局プロデューサー…深谷守、
【司会】タレント…麻木久仁子、【朗読】岡本りか～東京・ルポール麹町で録画～

「見たいテレビがない」<「視点論点」2006年6月14日・教育テレビ・10分>

「まん延するニセ科学」<「視点論点」2007年2月7日・教育テレビ・10分>

「ねつ造問題・その背景は」＜「視点論点」2007年2月7日・教育テレビ・10分＞
 「問われる食品の健康情報」＜「視点論点」2007年2月14日・教育テレビ・10分＞
 「IT時代の情報断食」＜「視点論点」2007年2月22日・教育テレビ・10分＞
 「マンガノゲンバ」＜特集：『団地ともお』・2006年7月4日・BS2・40分＞
 「情熱大陸」＜特集：上野樹里・2007年5月25日・BSN・30分＞

参考および引用文献：

「十二世紀のアニメーション～国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの」高畑勲、徳間書店 1999年。
 「謎解き伴大納言絵巻」黒田日出男、小学館 2002年。
 「よみがえる源氏物語絵巻～平成復元絵巻のすべて～」企画展カタログ、監修：徳川美術館（名古屋）新潟展は、2006年4月22日～6月4日、新潟市歴史博物館にて開催。
 「アニメーションの世界へようこそ」山村浩二、岩波ジュニア新書、2006年。
 「新潟日報」2007年1月1日 特集記事。「コメディエンヌと呼ばれることはいいことかなと思う」という本人の発言が注目される。
 「読売新聞」2006年10月29日・上野樹里インタビュー記事。
 「W プレイボーイ」2006年No41. 10月9日号 p.81-84. 上野樹里インタビュー記事。
 「映画・笑う大天使・オフィシャルフォトブック」白泉社 2006年。
 「チルソクの夏・自分の原風景を追いかけて～インタビュー：佐々部清監督」取材・文＝金澤誠、『キネマ旬報』2004年4月下旬号（No1403）p.62-63。
 「キネマ旬報」2004年4月下旬号（No1403）p.62-63. 「チルソクの夏・インタビュー 佐々部清氏監督および映画評。
 「チルソクの夏・作品評」（文＝西脇英夫）『キネマ旬報』2004年4月下旬号（No1403）p.64.
 「キネマ旬報」2004年1月上旬号（No1396）p.46-51. 「特集：ジョゼと虎と魚たち。対談・妻夫木聡／池脇千鶴、インタビュー：脚本家・渡辺あや、および映画評。
 「虹の女神・作品評」（文＝服部香穂里）『キネマ旬報』2007年11月下旬号（No1471）p.104.
 「虹の女神・対談：監督・熊澤尚人／プロデューサー・岩井俊二」『キネマ旬報』2007年11月下旬号（No1471）p.152-157.
 「虹の女神・PHOTO BOOK」ぴあ株式会社、2006年。
 「出口のない海」横山秀夫、講談社文庫 2006年。
 「出口のない海・作品評」（文＝増當竜也）『キネマ旬報』2007年11月下旬号（No1403）p.110.

- 「上野樹里 PHOTO BOOK A PIACERE」ワニブックス 2006年。
- 「上野樹里 1st 写真集 JURI first」講談社 2004年。
- 「INVITATION」2006年2月号 p.50-51. 「亀は意外と早く泳ぐ：映画批評」。
- 「ファミマ・ドット・コム・マガジン」2006年12月号。
- 「小説のだめカンタービレ」高里椎奈 二ノ宮知子 江藤凜、講談社 2006年。
- 「ドラマ『のだめカンタービレ』ミュージック・ガイドブック～ドラマの世界にどっぷりはまろう」ヤマハミュージックメディア 2006年。
- 「月間テレビナビ」2006年12月号。p.37-54. 『特集：マンガがテレビを熱くする』。
- 「漫画原作の日本映画少史」『キネマ旬報』2006年 p.33-35.
- 「本広本」キネマ旬報社 2006年。
- 「NHK ウィークリー・ステラ」2007年2月16日号、「上野樹里インタビュー」
- 吉田和比古「物語の構造<1>『昔話』から『現代メディア』へ」『新潟大学言語文化研究』第3号、p.1-29、1997年。
- 吉田和比古「物語の構造<2>『昔話』から『現代メディア』へ」『新潟大学言語文化研究』第5号、p.131-150、1999年。
- 吉田和比古「物語の構造<3>映像言語教育としての『メディア・リテラシー』へ」『新潟大学言語文化研究』第6号、p.85-100、2000年。
- 資料収集にあたっては、ゼミを中心とした学生諸君およびOBに大変お世話になった。名前を列挙して謝意を表したい。相楽紘子、高橋南、本間美季子、福田肇、小野里隆、吉田仁志、坂井恵。あわせて、校正を手伝ってくれた八子さやかさんにも感謝する。